



生き生きとした自分を見つめるための実用生活誌

はじまりのページ

Shukokai-Magazine The page of beginning

2016 Spring NO.35

ダイジェスト版

特集

最新 免疫細胞 療法ガイド

～「ここぞ」というとき効果を発揮する3つの療法～

SHUKOKAI

名医がアドバイス

身近で“危ない”病気の防ぎ方

第1回 骨粗しょう症から“骨”を守る

CONTENTS

- 2 思いの言の葉 Vol.31
“がん撲滅”の切り札
- 3 もう1歩健康になるアドバイス
Healthy Advice
- 4 特集
最新 免疫細胞療法ガイド
～「ここぞ」というとき効果を発揮する3つの療法～
- 10 名医がアドバイス
身近で“危ない”病気の防ぎ方
第1回 骨粗しょう症から“骨”を守る
- 12 ハスミワクチン・ドキュメンタリー
二人で**花咲く**道を歩む
- 15 連載コミック
第30回 ほのぼのJiJi・BaBa 松&梅
- 16 免疫療法で“がん”を治すQ&A
- 18 珠光会通信
珠光会グループのお知らせ・情報・話題をお届けします
- 20 免疫療法コンシェルジュからお知らせ



“がん撲滅”の切り札

蓮見賢一郎 医療法人社団 珠光会 理事長

1960年代後半から70年代にかけて「世界一の美女」の名をほしいままにした女優といえば、カトリーヌ・ドヌーヴではないでしょうか。『シエルプールの雨傘』『昼顔』など、忘れ得ぬ名画はたくさんありますが、彼女が1967年に主演した映画に『ロシユフォールの恋人たち』という作品があります。フランス西南部の海辺の街で年に一度開催されるフェスティバルを舞台にした物語ですが、私の胸にその華麗なストーリーと同じくらい鮮明に焼き付けられているのは『You Must Believe in Spring (春を信じて)』という主題歌なのです。

「あなたの心が孤独に凍えるとき、冬の彼方から訪れる春に思いをはせてみませんか
氷に閉ざされた山は、やがて巡る雪解けのせせらぎを夢見ています
雪に覆い隠された世界でも、すべてのものは確実に変化し続けているのです
春がやって来ることを信じましょう
きっと、すぐそこに春が…… (一部抜粋)」

ジャズピアニスト、ビル・エヴァンスの演奏でも有名なこの曲は、決して順調とは言えない環境にありながらも明日の幸福を夢見、少しずつでも前へ進んでいくとする人の思いが透け見えて、私にとって大変印象深い楽曲となっているのです。季節は春……。新しいものと古いもの、そして、出会いと別れが交錯するこの時期に、みなさまへ珠光会グループの新しい取り組みについてお伝えできることを、とても嬉しく思います。今年、珠光会グループは「がん撲滅」の切り札として「樹状細胞を用いた新しいがん予防」のプロジェクトをスタートさせることになったのです。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、日本人のがん死亡率は主要先進国の中でも極めて高く、人口10万人単位では米国の約1.6倍にも達します。しかも、患者数は欧米では1990年代前半から減少傾向にあるにもかかわらず、日本では増加の一途をたどっているのです。その原因には、いくつかの要素が挙げられますが、決定的なのは日本がいつに到達した超高齢社会そのものです。

「樹状細胞を用いた新しいがん予防」は、まさに後期高齢者層を中心とした免疫療法。つまり、「がん大国」日本の医療状況を一变させる可能性をも秘めているわけです。治療のプロトコルや受診方法など、具体的なインフォメーションをお伝えできるのはもう少し先になると思います。プロジェクトの目途が立ちしだい、本誌でお知らせいたしますので、暫時お待ちください。

「逆にいえば、がんの増加をけん引する後期高齢者層の発がんを抑制できれば……」

日本のがん発生率は大幅に減少し、死亡率の低下から、一層の健康長寿を享受できるようになるでしょう。珠光会が着手する「樹状細胞を用いた新しいがん予防」は、まさに後期高齢者層を中心とした免疫療法。つまり、「がん大国」日本の医療状況を一变させる可能性をも秘めているわけです。治療のプロトコルや受診方法など、具体的なインフォメーションをお伝えできるのはもう少し先になると思います。プロジェクトの目途が立ちしだい、本誌でお知らせいたしますので、暫時お待ちください。

「逆にいえば、がんの増加をけん引する後期高齢者層の発がんを抑制できれば……」

日本のがん発生率は大幅に減少し、死亡率の低下から、一層の健康長寿を享受できるようになるでしょう。珠光会が着手する「樹状細胞を用いた新しいがん予防」は、まさに後期高齢者層を中心とした免疫療法。つまり、「がん大国」日本の医療状況を一变させる可能性をも秘めているわけです。治療のプロトコルや受診方法など、具体的なインフォメーションをお伝えできるのはもう少し先になると思います。プロジェクトの目途が立ちしだい、本誌でお知らせいたしますので、暫時お待ちください。

Healthy Advice.
もう1歩健康になる
アドバイス

記憶は残り続ける

アルツハイマー病の日本での患者数は、推計約92万1千人(2015年10月現在)。超高齢社会に突入した我が国の大きな問題となっている。

アルツハイマー病初期の記憶障害は、記憶の形成、保存、想起に重要な役割を果たす脳の「海馬」が、神経細胞の変性などによって、正常に働かなくなるために生じると考えられている。しかし、そもそも記憶障害の実体が「新しい記憶を形成できない」のか、「一旦形成された記憶を思い出せない」のか不明だった。その実体を理化学研究所の利根川進博士(理研 MIT 神経回路遺伝学研究中心) 1987年ノーベル生理学・医学賞受賞)の研究チームが解明したという。

人間のアルツハイマー病患者と同じ神経変性を起こす「アルツハイマー病モデルマウス」を使って実験したところ、マウスは記憶を正常に形成して保存しているが、想起できなくなっている可能性が高いことがわかったのだ。つまり、大切な記憶はきちんと保存されるのだが、それを取り出せなくなった状態がアルツハイマー病(初期)というわけである。

アルツハイマー病に限らず、認知症患者のお世話には労苦を伴う場合が少なくない。しかし、「脳はあなたを覚えている」。そう考えれば少しは気持ち軽くなるのではないだろうか。患者は「感謝」を取り出せないだけなのだ。

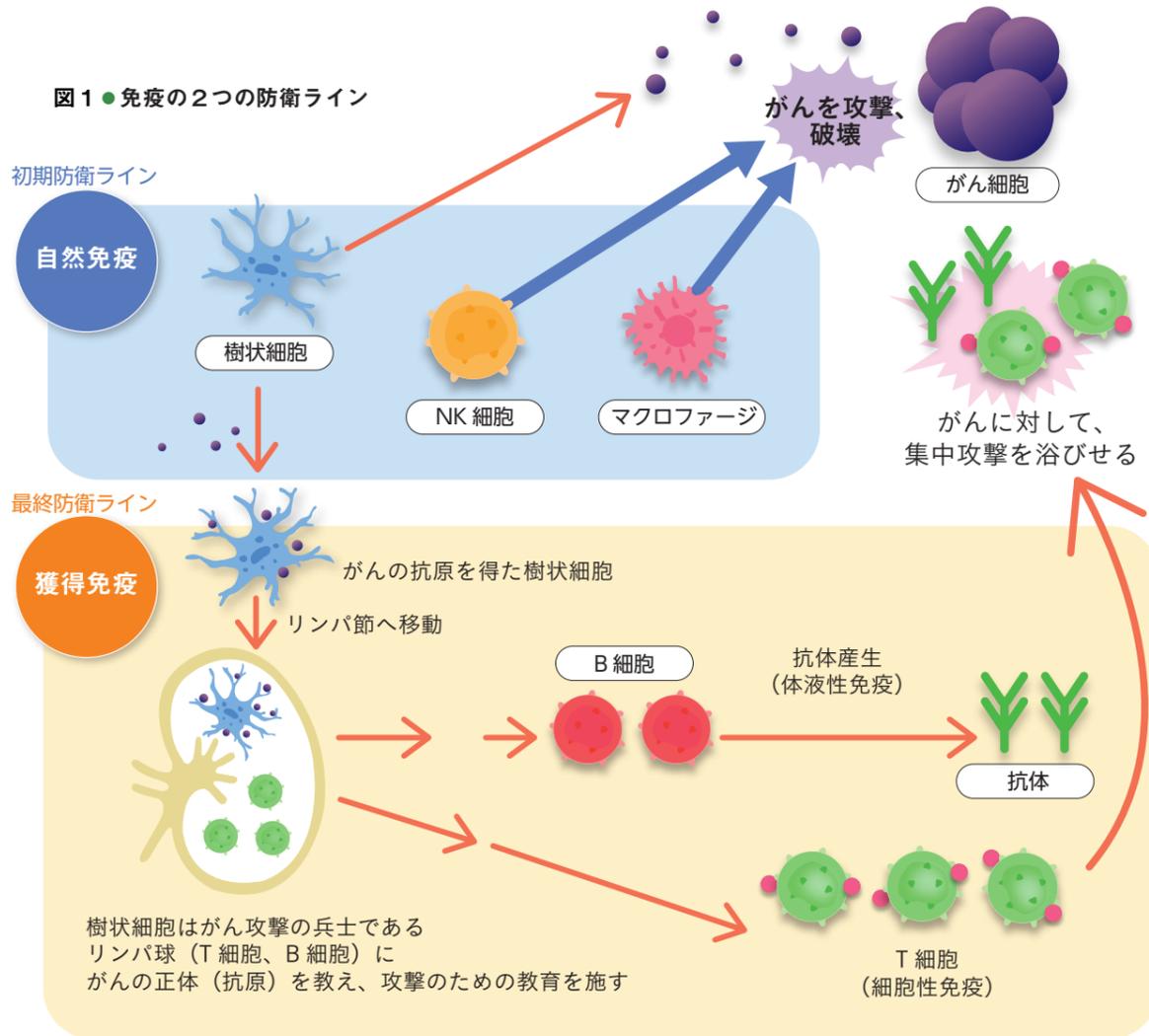


— 特集 —

最新

免疫細胞療法ガイド

～「ここぞ」というとき効果を発揮する3つの療法～



免疫の初期防衛ラインは“自然免疫”。
そこで撃退できなかった異物は、強力な攻撃力を有する
“獲得免疫”が攻撃をしかける

最もポピュラーな免疫細胞療法

現在、世界中で用いられている免疫細胞療法のうち、よく知られているものとして、「LAK(ラック)療法」、「NK(ナチュラル・キラー)細胞療法」、「γδ(ガンマ・デルタ)ーT細胞療法」などが挙げられます。

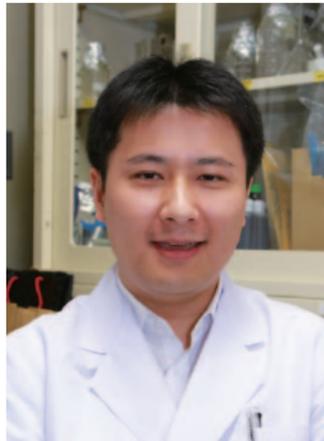
「人間の免疫は、生まれながらに備えている『自然免疫』と、高度な生命体のみ備わった『獲得免疫』の2段階で異物と闘います(図1)」。説明してくれたのは、蓮見国際研究財団・東京リサーチセンターの井島史博さん。井島さんは生化学で博士号を取得しているエキスパートです。

「免疫の要となるリンパ球には、『NK細胞』や『T細胞』などの免疫細胞が数多く存在しています。それらを体外で一挙に増殖させて体へ返すのがLAK療法(図2)。NK細胞だけを増やして(体内へ)戻すのがNK細胞療法です(図3)」。井島さん

リンパ球に10%ほど含まれるNK細胞は、自然免疫の強力な兵士。常に体内をパトロールし、腫瘍細胞などの異常な細胞を発見すると即座に攻撃を開始します。まさに、「初期免疫防衛ライン」には欠かせない主役といえるでしょう。

「体内にはおおよそ1億個ほどのNK細胞が巡回しています」そう解説してくれたのは、蓮見国際

免疫療法は1890年代、米国の医師ウィリアム・コーリー(William Coley)が、細菌を用いて悪性腫瘍を縮小させたことがはじまりとされています。以来、120年以上にわたってさまざまな形態に分化した免疫療法は、効果のあるものは進化し、効果のないものは消え去る“自然淘汰”を繰り返し、現在はおおよそ3つの方法が世界中で治療に活用されています。今回の特集はこの3つの“免疫細胞療法”を中心に、免疫が切り開くがん治療の新しい地平を検証します。



蓮見国際研究財団・東京リサーチセンター

井島 史博さん

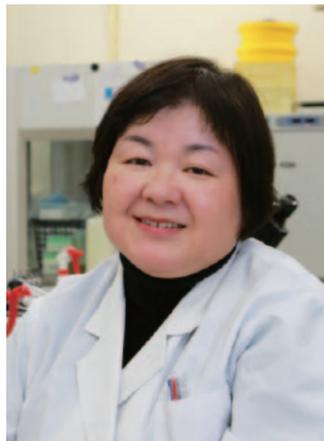
「免疫細胞療法には、単独で「がん」を消失させるほどのパワーはありません。しかし、使い方次第で、個別に効果を解説することは難しいですね」(井島さん)

例えば、「かぜ薬」というくくりの中に、たくさん市販薬が並んでいるようなものでしょうか。成分に若干の差はあるものの、各商品に際立ったオリジナリティがあるわけではありません。

「つまり、薬剤師が患者様の症状を聞いて有効な薬を選ぶように、免疫細胞療法も医師の適切な判断に基づいて選択される必要があります」と、渡部さんが続けた。「免疫療法の臨床例を多くお持ちの医師なら、患者様の症状や体力などに鑑みて、経験的に最適な療法を推薦してくれるでしょう」(渡部さん)

免疫療法の臨床といえば、世界的に見ても蓮見賢一郎先生ほど経験豊富な医師は、そう多くないでしょう。蓮見先生は免疫細胞療法について、どのような見解をお持ちなのでしょうか。

「免疫細胞療法には、単独で「がん」を消失させるほどのパワーはありません。しかし、使い方次第で、個別に効果を解説することは難しいですね」(井島さん)



蓮見国際研究財団・東京リサーチセンター

培養室課長

渡部 柳子さん

第では、大変効果的な療法といえるでしょう」(蓮見先生)

免疫はもともと細菌やウイルスなどの「ミクロの敵」に対する防衛機構です。がん腫瘍のような強大な敵が相手では、いくら体外から応援部隊を送り込んでも荷が重いというわけです。免疫力のみでがん腫瘍を消失へ導く可能性は、今のところICVS東京クリニックで実施している「HITV療法※1」が最も高いといっても過言ではないでしょう。

「免疫細胞療法の使い方は、おおよそ2つに大別されます。ひとつは手術などで腫瘍が取り切れている場合に、再発予防として用いる方法。腫瘍を切除しても、血液中には「がんの芽」ともいうべき微細ながん細胞が浮遊している場合があります。こうした小さな異物なら、免疫細胞療法でも対抗できるケースが少なくありませんので、再発を防ぐという意味では、各細胞療法ともに効果を発揮してくれるはずです」(蓮見先生)

図2 ● LAK療法の仕組み

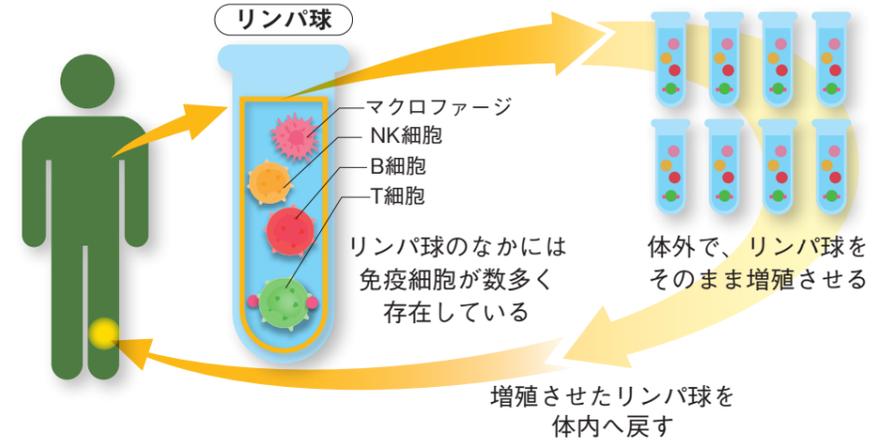


図3 ● NK細胞療法の仕組み

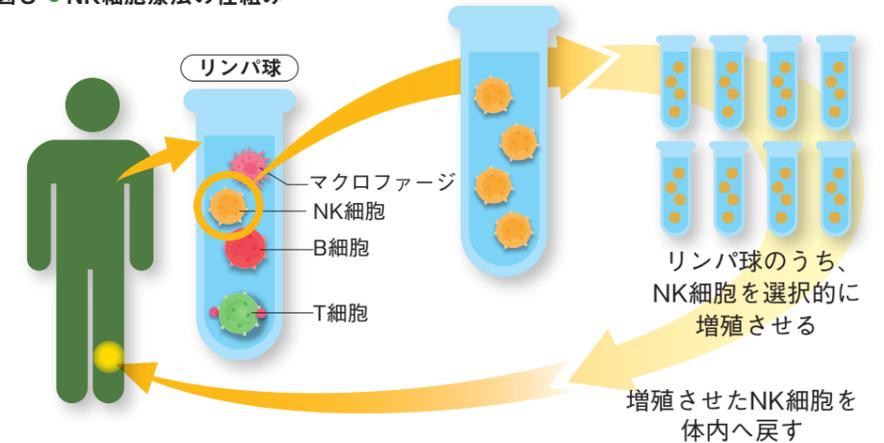


図4 ● 抗原なしでも攻撃できるγδ-T細胞



CTLなどの免疫細胞は、抗原が提示されたがん細胞めがけて攻撃を開始する

γδ-T細胞は抗原がなくても攻撃をしかけられる

2つに大別される免疫細胞療法の用い方

「LAK療法」「NK細胞療法」「γδ-T細胞療法」、それぞれ具体的にはどんな効果を得ることができるのでしょうか。

「3つの療法ともに「免疫力を高める」という効果があります。しかし、それぞれの療法で用いる免疫細胞が重複していることもあり、各療法に対して、研究財団・東京リサーチセンターの培養室課長、渡部柳子さんです。

「細胞療法のための採血は30cc。その中に含まれる300万個ほどのNK細胞を、10億個から20億個に増やして体内へ戻すわけですから、免疫機能が一気にパワーアップするわけです」(渡部さん)

このNK細胞療法に対して、「獲得免疫」の一員であるT細胞の一種に働きかけるのが、γδ-T細胞療法です。

リンパ球中になぜか2〜3%しか含まれていないというγδ-T細胞は、がんなどの異常細胞に発現する分子や、がん抗原(免疫細胞が攻撃の目印にするたんぱく質)以外のさまざまな目印によってがん細胞を認識することができます。従って、抗原を提示しないがん細胞に対しても攻撃を加えることが可能なのです(図4)。

「そのスタインマン先生が、2004年にロンドンで開催した第3回「国際がんワクチンシンポジウム」※3の席上で、大変興味深い報告をいたしました。——免疫反応で重要な役割を果たしているのは「NK T細胞」である公算が高い、ということです」（蓮見先生）

NK T細胞はT細胞とNK細胞両方の特徴を備えた特殊な免疫細胞です。免疫の最終防衛ラインである「獲得免疫」にしかないと思われてい

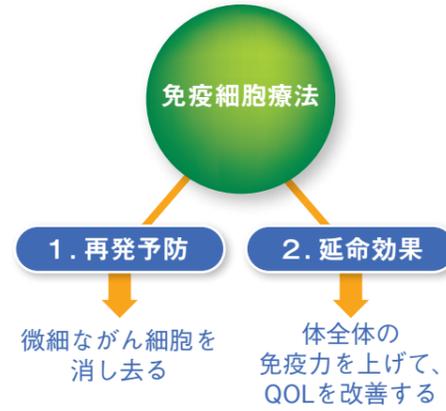
作られています」と、渡部さんはいいます。「もちろん環境だけでなく、培養資材は最高のものを使っていますし、現場スタッフも心血を注いでいます。最高の治療効果をもたらす細胞を作る——それは科学技術者としての矜持ですね」

「本誌でも何度か触れましたが、2011年にノーベル生理学・医学賞を受賞したラルフ・スタインマン教授には、長年珠光会グループの蓮見国際研究財団で顧問を務めていただきました」蓮見先生が静かに語りました。



米国法人 蓮見国際研究財団 理事長
蓮見 賢一郎先生

図5 ●免疫細胞療法——2つの使い方



「健康な人の場合でも、一日5000個ほどの「がんの芽」が発生しているといえます」渡部さんが説明してくれました。「この「芽」は免疫システムのお蔭で発芽前に駆除されてしまうのですが、逆にいえば、がんは日々5000個のがんの芽を潰し続けてきた免疫システムが、ある日、ただ1個の芽を見逃したために発生するわけです。免疫の努力を考えると、予防の重要性が身に沁みますが、術後は通常のがんの芽に加え、腫瘍の影響による芽も加わりますので、一層免疫力を上げておく必要があると思います」

「免疫細胞療法のもうひとつの使い方は「延命」です」蓮見先生が先を続けました。「主に「再発してしまっただけ」や「手術等の治療が難しい人」などが対象となりますが、各免疫細胞療法は身体全体の免疫力を全体的に押し上げるため、QOL（生

活の質）を改善させる効果が期待できます。抗がん剤治療などを行っている場合は、副作用が懸念されますが、免疫細胞療法を併用すると、苦痛が軽減されるケースが多々みられます。こうしたQOL改善と免疫力アップによる（病気に対する）耐性強化により、延命効果が得られるわけです（図5）」（蓮見先生）

ところで、各療法の主役となる免疫細胞は、どんな環境で培養されているのでしょうか。前号でもお伝えしましたが、2014年に施行された「再生医療等安全性確保法」により、再生医療等技術を用いて行われる医療を提供しようとする医療機関や、特定細胞加工物※2を製造する施設などは、すべて認可制になりました。珠光会グループは、東京の蓮見癌研究所内に2つのCPC（Cell Processing Center「細胞培養室」）を持つていますが、両方とも民間の施設ではかなり早い段階で、厚生労働大臣より製造許可を受けています。細菌やウイルスなどの侵入を排除したCPCは、培養細胞の安全性のみならず、治療全体の高い水準を担保しているわけです。

「患者様に提供する細胞は、とても安全な環境で

た「免疫記憶機能※4」を備えており、自然免疫と獲得免疫の「橋渡し」的な任務を担っているのではないかと考えられています。

「実は最近、HITV療法で治療に至った患者様の細胞を調べた結果、NK T細胞が活性化されていることが判明したのです。NK T細胞には「長期にわたる抗腫瘍効果」が期待されていますが、この細胞はNK細胞療法の過程で増殖させることができます。つまり、HITV療法以外の免疫療法では、ハシミワクチンにNK細胞療法を加えるやり方が最も効果的だと考えられるわけです」（蓮見先生）

ハシミワクチンは、がんワクチンとして「獲得免疫」に作用します。要するに、自然免疫の範疇ではNK細胞療法を用いてNK細胞とNK T細胞を活性化させて、獲得免疫の範疇ではハシミワクチンを用いてがん細胞にダメージを与える——。この免疫の機能をフル稼働させた2段階攻撃が、（HITV療法を除けば）最大の抗腫瘍効果を発揮する可能性があるというわけです。（図6）

免疫細胞療法は、例えば再発率の高まる術後5年間というような、「ここぞ」というタイミングで用いられ、とても頼りになる治療法です。転ばぬ先の杖として知識を深めておくことが、再発予防の「鍵」になることは間違いありません。

「再生医療等安全性確保法」により、再生医療等技術を用いて行われる医療を提供しようとする医療機関や、特定細胞加工物※2を製造する施設などは、すべて認可制になりました。珠光会グループは、東京の蓮見癌研究所内に2つのCPC（Cell Processing Center「細胞培養室」）を持つていますが、両方とも民間の施設ではかなり早い段階で、厚生労働大臣より製造許可を受けています。細菌やウイルスなどの侵入を排除したCPCは、培養細胞の安全性のみならず、治療全体の高い水準を担保しているわけです。

「患者様に提供する細胞は、とても安全な環境で

ノーベル賞受賞者が予見した
NK T細胞の働き



蓮見癌研究所

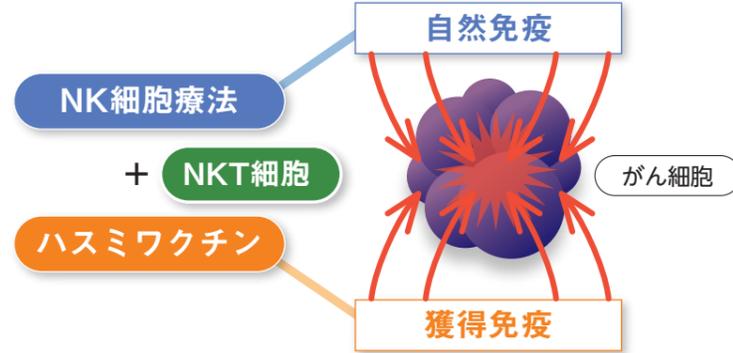


活性リンパ球の顕微鏡写真



蓮見癌研究所内のCPC。高い安全性を保っている

図6 ●細胞療法の最適な組み合わせ



NK細胞療法で、NK細胞とNKT細胞を活性化させ、ハシミワクチンでさらにがん細胞にダメージを与える

※1 HITV療法：HITVは Human Irritated Therapeutic Vaccine（ヒト由来治療型ワクチン）という意味。体外で培養した樹状細胞（獲得免疫の中心細胞）を直接がん腫瘍内に送り込むことにより、劇的な治療効果を発現させる最新免疫療法

※2 特定細胞加工物：再生医療等に用いられる細胞加工物のうち、再生医療等製品以外のもの

※3 国際がんワクチンシンポジウム：米国法人 蓮見国際研究財団が主催する国際的な学術会議。現在までに世界7都市で開催している。

※4 免疫記憶機能：一度侵入した抗原（免疫細胞が攻撃の目標とする対象）に対し、その情報を記憶する機能



元東京都リハビリテーション病院 院長 **林 泰史** 先生

Profile
1939年生まれ。64年京都府立医科大学卒業。65年東京大学整形外科に入局。東京都多摩老人医療センター院長、東京都老人医療センター院長、東京都老人総合研究所所長、東京都リハビリテーション病院院長などを経て、現在、原宿リハビリテーション病院名譽院長。著書は「若々しく丈夫な骨をつくる本」(講談社)、「骨の健康学」(岩波書店)など多数。

名医がアドバイス

身近で“危ない”病気の防ぎ方

第1回 骨粗しょう症から“骨”を守る

骨折から“寝たきり”へ一直線——。そんな最悪なケースをも招きかねない病気が「骨粗しょう症」です。毎回各分野の名医にご登場いただき、私たちの生活の傍らに潜む“危ない”病気について解説していただく本シリーズ。第1回は骨粗しょう症の権威、元東京都リハビリテーション病院院長林 泰史先生にお話をお伺いいたしました。

圧倒的に女性患者が多い理由

——超高齢化社会の進展に伴い、益々増加しているという「骨粗しょう症」ですが、現在日本では、どれくらいの方がいらっしゃるのでしょうか？

林先生「おおよそ1270万人ぐらいいだといわれています。高齢者人口がだいたい3000万人ですから、約40%が骨粗しょう症に罹患しているわけです。今後75歳以上の後期高齢者が増加するにつれ、益々(患者数は)増加するものと思われます」

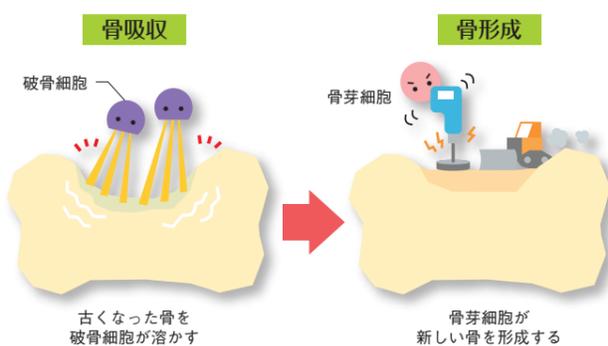
——男女比では、やはり女性の方が多いのですか？

林先生「女性が7〜8割、男性が1〜2割といわれていますね。女性に骨粗しょう症が多いことには、2つの原因があります。1つ目は体格の差。一般的に女性は男性より早く成長が止まってしまったため骨格が小さく、カルシウムのストックも(男性と比べて)20%ほど少ないといわれています。従って骨粗しょう症に陥りやすくなってしまっているのです。そして、2つ目の原因が閉経後の女性ホルモンの分泌減少です」

——ホルモンとは、体内の組織や器官の活動を調整する生理的な物質のことですね。

林先生「はい。骨は古い骨を破壊(骨吸収)する、破骨細胞と、新しい骨をつくる、骨芽細胞の働きによって、日々

図1 骨代謝の仕組み



新陳代謝を繰り返していますが(図1)、女性ホルモンである、エストロゲン(卵胞ホルモン)には、破骨細胞を減らして骨芽細胞を増やす働きがあります。また、ビタミンDをカルシウム吸収に欠かせない、活性型ビタミンD3に変換させる働きもありますので、女性ホルモンの分泌が急減する閉経直後には、骨密度も一気に15%も減少してしまうわけです。乳がんや子宮がんのように女性だから罹患するという類ではないのに、これほど女性に多いという点ではとても珍しい病気ではないでしょうか

● 解釈が変わってきた原因

——女性には要注意ということですね。ところで、そもそも「骨粗しょう症」とはどんな病気なのでしょう？

林先生「もともとも新しい定義では、骨の一定の体積中のカルシウムとコラーゲンが等しく減少するだけでなく、コラーゲンも脆くなって骨強度が低下し、骨折が生じやすくなった病気を、骨粗しょう症と呼んでいます。昔はカルシウムに注目が集まっていたんですが、カルシウムのみの減少は「骨軟化症」と呼ばれ、骨粗しょう症とは区別されています。ちなみに、骨軟化症は骨組織へのカルシウムの沈着障害が原因で生じます」

——骨粗しょう症に対する解釈が変わってきたということでしょうか？

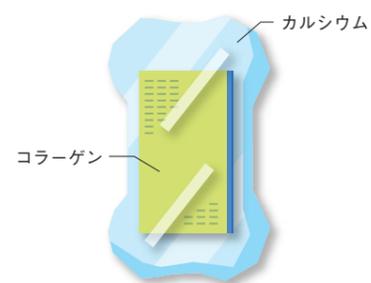
林先生「そうですね。現在スポットライトが当たっているのは「コラーゲン」です。骨はレントゲンで見

るとカルシウムの塊のように見えますが、よくよく調べてみると体積の50%は「コラーゲン」なのです。例えば、畳を水に濡らしてパキパキに凍らせた状態を思い浮かべてください。この状態がすなわち「骨」です(図2)」

——畳の部分がコラーゲン、全体を氷結させているのがカルシウムということですか？

林先生「はい。骨粗しょう症という骨がスカスカになって鬆が入った状態、という説明が定番だったのですが、特に鬆のようになつていなくても骨折してしまう人が多く、これはどうしたことが……と調べていくと、原因は骨に含まれる繊維質——コラーゲンに あったわけです。鉄筋コンクリートの鉄筋同様、コラーゲンがもろくなると骨全体の劣化、崩壊につながるわけです」

図2 骨の構造(イメージ)



● 忘れてはならない3原則

——骨粗しょう症にならないためには、日頃どんなことに気を付けていけばよいのでしょうか？

林先生「カルシウムの多い食事を摂る、日光を多く浴びる、運動をする——というのが、予防の3原則になります(下図)。カルシウムを多く含む食品は牛

乳や豆腐、野菜なら小松菜や切り干し大根などです。日光を浴びると、強い骨の形成に役立つビタミンDが活性化されますし、運動には骨の代謝を促す働きがあります。ウォーキングなど、適度な運動をマイペースで行うのがよいでしょう。

骨密度が若い人の70%以下に低下したら、病院での治療が必要となる場合も少なくありません。

治療はカルシウム剤、骨の破壊を防ぐ薬、骨を作る薬などを用いた薬物療法が主体です。しかし、あくまでも先ほど申し上げた3原則が基本となりますので、食事・日光・運動は常に意識することが肝心です」

予防の3原則



——本日は有意義なお話をお聞かせいただき、ありがとうございます。最後に読者の皆様へメッセージをいただきたいのですが。

林先生「骨粗しょう症で怖いのは、なんといっても骨折。特に大腿部頸部(太ももから股関節にかけて)の骨折は、寝たきりから介護状態へ一直線に退転してしまう危険を秘めています。中年・老年期は人生の集大成という意味でも、充実したものでなくてはなりません。生き生きとした暮らしを破綻させないためにも、特に女性の方は予防の3原則に留意し、健康な毎日をお過ごしください」

Information
林泰史先生は、6月4日(土)に開催される「紀尾井フォーラム・定期健康講座」で、“骨粗しょう症”をテーマにご講演されます。実例を挙げながら検査・診断・治療・予防に至るまでわかりやすく解説いたしますので、特に40歳以上の女性はぜひお聴きくださいますように。お申し込みは23頁をご覧ください。



自分で見つけた「乳がん」

内野堯子さんがご主人の輝男さんと結婚したのは、今から47年前——。堯子さんが29歳のときだった。

輝男さんの実家は東京の高級住宅地の、近辺では一番古い酒屋だ。その隣に堯子さんの親戚が住んでおり、日頃から家族同然の交流があったのだそうだ。

「小さい頃から親戚連中みんなで遊んでいたの。幼なじみのようなものですかね……」

そう言って笑う輝男さん、学生時代は東京藝術大学で絵画を学ぶ画学生だったという。20世紀前半、

パリのモンパルナスに集った画家たちのなかでも特に洒落者といわれたアメデオ・モジリアーニのファンであり、当時ご自身が多く描かれたのも人物画だったそうだ。

「家業は長男が継ぐことになっていたので、私はのんびりと絵を描いていました。ところが兄が病気になるってしまってますね。家業を潰すわけにもいかず、芸大をやめて酒屋を継いだわけです」（輝男さん）

輝男さんが傍らを見遣りつつ「行きそびれてたから、もらってやったんだよ」とうそぶくと、堯子さんは——

「若いときは（輝男さんのことを）よく知りませんでしたからね。特に意識したこともなかったし

二人で花咲く道を歩む

がんを克って生きる 第1回

今回から装いも新たにお送りする

ハスミワクチン・ドキュメンタリー——。

初回は長年ハスミワクチンと共に苦楽を共にしてきた、あるご夫婦の物語です。

東京都

内野

たか

堯子さん(76歳)

輝男さん(80歳)

……」

と答える。その思いの他冷静な語り口に、傾聴していた記者もつい笑ってしまいました。流行のファンタジーで例えるなら、輝男さんは陽気で元氣な勇者。堯子さんは聡明で泰然とした賢者——。一見対照的に見える二人だが、実は絶妙なコンビネーションで、微笑ましいリズムを刻んでいるのである。

「結局、主人とはお見合いで結婚しました。誠実な人だということはわかっていましたので。心配なことは特にありませんでしたよ」（堯子さん）

「うちの家系は、男腹、なんです」（輝男さん）
ご主人のいう通り、三人の息子さんに恵まれた堯子さん。順調な生活に影が差したのは、今から16年前。60歳のときだったと語る。

「お風呂からあがってバスタオルで体をふいているとき、胸のあたりに、しこりを感じたのです。これはもしかしたら……と思い、すぐに阿佐ヶ谷の珠光会診療所（当時）へ向かいました」

堯子さんの迅速な対応には理由がある。遡ること20年、S字結腸がん、に陥った輝男さんが、すでにハスミワクチンの治療を受けていたのである。

病を乗り越えて進む

輝男さんが東京の阿佐ヶ谷にあった珠光会診療所を受診したのは1980年の9月。先代の院長蓮見喜一郎先生は、輝男さんの検査結果に目を落とすと、ほっと息をついて所見を述べたという。

——危なかったね。この病院へ来なかつたら、君の余命は2カ月くらいだったよ……。

「ズバリいわれたものだから、頭の中が真っ白になってしまいました。言葉を発せられずにあたふたしていると、先生が『大丈夫、私と一緒にがんを治そう』といってくれたのです。グッときましたね」（輝男さん）

意気を感じた輝男さんは、以来ハスミワクチンの治療を続け、治癒の目安となる『5年』をはるかに超えて、元氣そのものだったのだ。

「初めて賢一郎先生にお会いしたときは、物静かな優しい先生だな……と思います」と堯子さんは続けた。「主人を助けていただいたので、ハスミワクチンについては全面的に信頼していましたから。治療に対する不安は、まったくありませんでした」

堯子さんの乳がんはⅢ期——。つまり、リンパ節への転移が認められる状態だった。こうした場合の第一選択は原発巣の切除である。がん腫瘍がなくなれば、以後の免疫療法が二層効果的に作用するからだ。堯子さんは、珠光会グループの一般病院、聖ヶ丘病院で外科手術を受けることになった。

「何しろそれまでは病氣と縁遠く、麻酔も初めてだったくらいで……。だから、（手術を終え）病室で目覚めたときは

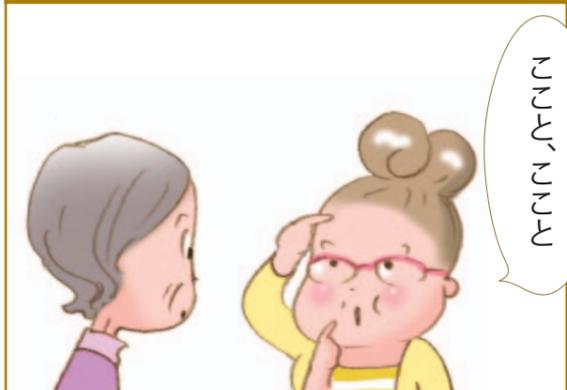
ほのぼのJiJi・BaBa
松 & 梅



小林 裕美子

1974年生まれ。雑誌や新聞、書籍のイラストで活躍するほか、『もち・ぼち』（徳間書店）、『大阪デビュー!』『うさんぼ』（牧野出版）、『もち・ぼちふたり』（ポプラ社）、『美大デビュー』『美大デビュー2』（同）などの著書がある。

シワとり



健康法



聖ヶ丘病院

「あー、生き返った」とため息をつきました。術後の抗がん剤の副作用で退院が遅延したものの、入院生活は概して快適だったと語る。「行ったことのある人はお分かりだと思いますが、まるで高級ホテルのような内装ですからね。ゆったりできるし……。変な言い方になりますが、聖ヶ丘病院はとっても心が休まる場所でした」

その後、堯子さんはハスミワクチンを続け、16年後の今日まで再発の兆候すらない。ただ、70歳のとき「大動脈解離※1」、74歳のとき「大動脈瘤※2」という大病を患ったが、幸いにしてそれらを乗り切り、現在は元気で暮らしているらしい。

「ハスミワクチンは保険外の治療ですので、躊躇される方もいらつしやると思います。けれど、生命はひとつしかありませんし、それは自分のものです。最後に決めるのは自分自身だということを忘れずに、後悔のない治療を選択してください」

そういうながら輝男さんを見つめる堯子さんの目は、満開の桜を映して優しく揺れていた。内野さんご夫婦が織り成す人生の花が、いつまでも生き生きと咲き誇ることを心よりお祈りしたい。

免疫力が上がるアドバイス

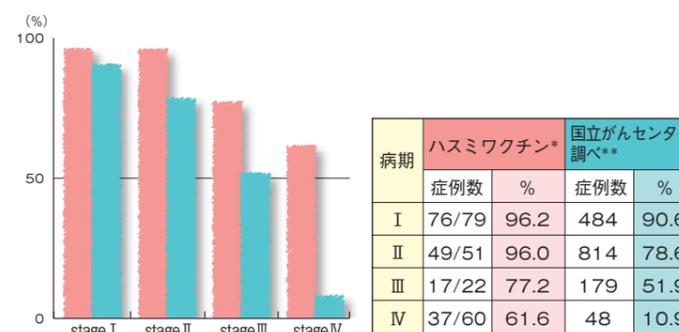
米国人 蓮見国際研究財団理事長 蓮見賢一郎

セルフチェックで早期発見

内野輝男さんは父の患者さんで、ハスミワクチンとも、ずいぶん長くお付き合いしていただいております。私が初めて堯子さんとお会いしたのは、本文にもある通り2000年。自己検診（セルフチェック）で、しこりを発見したのは、ご主人ががんに罹患したことが教訓になっているに違いありませんが、実は日本乳癌学会の調査によると、乳がん患者の70%はセルフチェックで異常を発見したのだそうです。つまり、乳がんは、自分で発見しやすいがん、だといえるでしょう。

堯子さんには手術後もハスミワクチンを続けていただいておりますが、ハスミワクチンは乳がんにとっても効果的ながんワクチンです。ワクチンの使用・未使用各5年生存率を比較してみると、ステージⅠの人は、ハスミワクチンを使った場合の5年生存率は96.2%。対して使わなかった場合は90.6%です。ステージⅡだとハスミワクチン使用が96.0%に対して、未使用の場合は78.6%まで落ちてしまいます。ステージⅢ、Ⅳになればさらに差が広がります。

ハスミワクチン（乳がん）の5年生存率比較図



*1990~1997年のハスミワクチン使用者824例から病期分類がなされている212例を対象
**1993~1998年国立がんセンター1,525例(2003年がんの統計)

本誌の特集でも触れましたが、ハスミワクチンは再発予防が主眼ですので、ステージの進んだがんを単体で消し去るほどのパワーはありません。しかし、使いどころが合えば、これほど頼もしい味方はいないでしょう。

いずれにしろ、がんは早期発見・早期治療が基本です。女性のみならず日々の生活のなかに、ぜひ乳がんのセルフチェックを取り入れてください。

※1 大動脈解離：大動脈の壁に亀裂が入ることにより、壁が内膜と外膜に分離されてしまう病気。迅速な対処を必要とする救急疾患。
※2 大動脈瘤：胸部大動脈や腹部大動脈の径が拡大し、こぶ状になったもの。これが破裂すると大量出血を招き、重篤な事態に陥る場合もある。

免疫療法で“がん”を治す

Immunotherapy Q&A

最近「BSL-48Clinic」や「免疫療法コンシェルジュ」に、ハスミワクチンをはじめとした免疫療法に関するお問い合わせが多く寄せられています。今回はその代表的な質問と回答をご紹介します。受診の参考にいただければ幸いです。



Q1 インターネットなどで調べると、免疫療法を掲げるクリニックがたくさんあります。良いクリニックを見分けるポイントはどこでしょう？

東京都 杉山 紀子さん（仮名）59歳

A1 ポイントのひとつは“細胞培養室”
ホームページのような外見だけで、実際の医療のクオリティを判断するのはとても難しいことです。しかし、ひとつポイントになることは、そのクリニックが治療に用いる細胞の“培養環境”ではないでしょうか。細胞の培養はCPC (Cell Processing Center = 細胞培養室) で行われますが、平成26年11月より「再生医療等安全性確保法」が施行され、その運用は認可制になっています*1。クリニックのCPCが厚生労働大臣の培養認可を受けているかどうかはもちろん、治療の根幹ともいべき細胞がどんな環境で作られているかを知ることは、その施設がどんな姿勢で治療に臨んでいるかを知ることもつながるはずです。

回答 米国法人 蓮見国際研究財団 培養室 渡部 柳子

*1. 珠光会の「細胞療法センター」と「東京リサーチセンター」のCPCは、関東信越地区でそれぞれ19番目と18番目に、厚生労働大臣より認可を受けました。

Q2 ハスミワクチンと、他の免疫療法の違いは、どんなところなのでしょう？

和歌山県 三島 勇吉さん（仮名）67歳

A2 ハスミワクチンは「獲得免疫」に作用します
免疫には体内に侵入した“異物”に対する初期の防衛ラインとなる「自然免疫」と、強い攻撃力を有し、“がん”などの難敵と闘う「獲得免疫」があります。LAK（ラック）療法やNK細胞療法などは「自然免疫」に作用する免疫療法であるのに対し、ハスミワクチンは「獲得免疫」に働きかける免疫療法なのです。その分、他の療法より際立った効果が期待できますが、場合に応じてLAK療法やNK細胞療法を併用すると万全かもしれません。いずれにしろ、術後の再発は危険な状態を招きますので、体への負担の少ない免疫療法で予防に徹することはとても有意義だと思います。

回答 BSL-48Clinic 院長 小林 秀紀

Q3 ハスミワクチンは、注射をしなくてはならないと聞いています。ちょっと怖い気がするのですが。

埼玉県 飯田 真理さん（仮名）48歳

A3 簡単にできるペン型があります
ハスミワクチンは、医療施設で投与することが基本ですが、注射指導をお受けいただいたうえで、自己注射をされている方も沢山いらっしゃいます。ハスミワクチンに使用する注射器は、一般的なものの他に、糖尿病のインスリン注射と同じような、“ペン型”もごございます。
ペン型は細くて短い注射針と、カートリッジ式のワクチンを用いる注射器で、使い方が簡単なうえ痛みも少ないので、自己注射に抵抗がある方には最適です。

回答 BSL-48Clinic 看護師長 池田 喜和子

Q4 現在、定期的にはリウマチの薬を服用しています。ハスミワクチンとの併用は問題ないのでしょうか？

宮城県 伊藤 順子さん（仮名）70歳

A4 副作用はありません
ハスミワクチンは体内の免疫系に作用するので、薬物的な副作用がありません。従って、どんな薬剤とも併用が可能です。ご心配がある場合は、BSL-48Clinicまでご連絡ください。

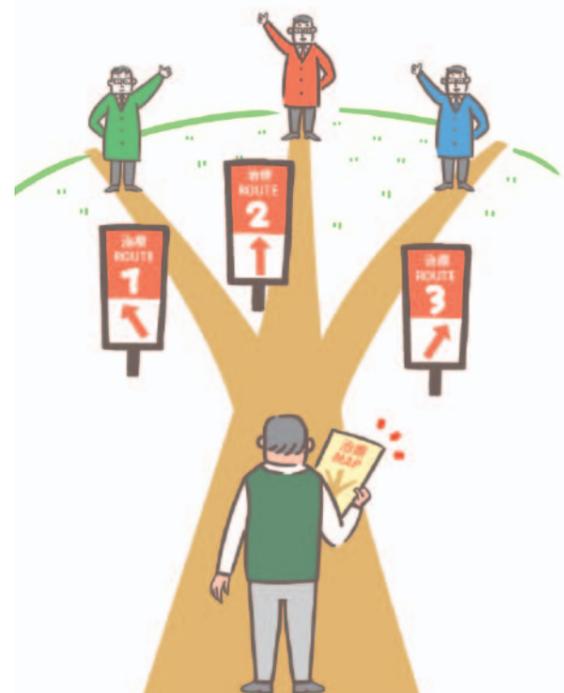
回答 BSL-48Clinic 院長 小林 秀紀

Q5 現在ハスミワクチンをお使いの方は、どれくらいいらっしゃるのでしょうか？

東京都 石原 真一さん（仮名）65歳

A5 延べ16万人の方がお使いになりました
1948年の臨床開始より、延べ16万人の患者様ががんの治療、再発予防にハスミワクチンを用いています。現在ご使用の方は、およそ1万5千人。患者様は日本をはじめとして米国、台湾、中国、ドイツなど世界各国に及んでいます。

回答 BSL-48Clinic 事務長 渋谷 大介



Q6 病院で胃がんのIV期だと告げられました。抗がん剤治療を受けようといわれましたが、ほかに治療の選択肢はないのでしょうか？

大阪府 木崎 範義さん（仮名）60歳

A6 選択肢はひとつではありません
保険治療の枠内で考えれば、担当医のいうとおり、抗がん剤治療か放射線治療ぐらいしか選択肢はありません。しかし、保険の枠外まで踏み出せば、治療の選択肢は数多く存在します。ただし、保険外の治療はピンからキリまでありますので、確かな情報を収集し、それが本当に効果のある治療なのかを確かめることが重要です。日頃からできるだけ多くの医療情報に触れ、知識を磨くことが、いざというとき身を助けてくれるでしょう。

回答 米国法人 蓮見国際研究財団 理事長 蓮見 賢一郎

第11回 定期健康講座

「心臓病——危険なサインを見逃さないコツ」

■ 講師：榊原記念病院副院長 伊東 春樹先生

伊東先生のプロフィール

1975年東京医科歯科大学卒業後、同大学医学部第二内科入局。1982年シカゴ大学留学。帰国後、東京医科歯科大学第二内科講師、千葉社会保険病院内科勤務。1991年より(財)心臓血管研究所付属病院勤務。2005年より現職。米国心臓病学会会員 (FACC)、ヨーロッパ心臓病学会会員 (FESC)、日本心臓病学会特別会員 (FJCC)。著書は『心臓病の予防・治療と生活のしかた』(主婦と生活社) など多数。

● “突然死” から身を守り、健康な日々を生きる

心臓病は日本人の死亡原因の第2位を占める病気。みなさまのなかでも健康診断などで“不整脈”を指摘され、ビクツとした方がいらっしゃるのではないのでしょうか。

心疾患というと「心筋梗塞」や「狭心症」といった病気につきまとう“突然死”のイメージが強いのですが、最近は診断や治療の技術が格段に進歩し、多くの患者さんの救命や予後改善に貢献しています。

本講演では心臓病の予防や治療、再発を予防する心臓リハビリテーションなどをわかりやすく解説します。病気の予兆となる危険のサインの見分け方も説明いたしますので、ぜひご来場ください。

■ 日時：9月17日(土) 午後2時～午後3時30分
※開場は午後1時30分

※両講演とも入場無料です。

※現在、両講演ともお申し込みを受け付けております。

※お申し込み・お問い合わせは電話、またはメールでお願いします。紀尾井フォーラム、BSL-48Clinicの受付でもお受けできます。電話は03(3556)1950、メールは『免疫療法コンシェルジュ』のウェブサイト、BSL-48Clinicのホームページからお入りください。

※定員になり次第締め切らせていただきます。

みなさまのお越しを心よりお待ちしております。



さる3月5日(土)、BSL-48Clinic院長の小林秀紀先生を講師にお招きし、第8回定期健康講座が開催されました。小林先生は1976年東京医科歯科大学卒業後、自衛隊病院、防衛庁での勤務を経て、2009年自衛隊中央病院院長に就任、2012年より現職という、スペシャルな経歴の持ち主。2011年に発生した東日本大震災の折には、医療チームの陣頭指揮を執ったという大変貴重な経験の持ち主です。

今回の講演では、そんな臨機応変のベテラン医師——小林先生だからこそ知っている「病気の回復を早めるコツ」「症状の悪化を防ぐツボ」を、ご自身の体験をもとにわかりやすく語っていただきました。日常生活の些細な行動、心の持ち方などの重要性を再認識させられる60分でした。

※ Web サイト「免疫療法コンシェルジュ」で、本講演の動画をご覧いただけます。携帯からでもアクセスできますので、過去の講演も併せてお気軽にご視聴ください。

免疫療法コンシェルジュ：
<http://wellbeinglink.com/>

Lecture

第8回 紀尾井フォーラム・定期健康講座が開催
「がん治療——
治癒を早める注意点」

「症状の悪化を防ぎ、改善へ導くチェックポイントを知る」

「紀尾井フォーラム・定期健康講座」
今後の予定

A course of lectures about healthy life in “Kioi Forum.”

BSL-48Clinic に隣接する紀尾井フォーラムで開催している「定期健康講座」も、

4月に行った和合治久先生(埼玉医科大学教授)のご講演で、第9回を迎えることができました。

これもひとえに参加して下さったみなさまのおかげだと、スタッフ一同感謝申し上げる次第です。

今後とも“がんの最新治療情報”のみならず、みなさまの健康に資するさまざまな叢智をお届けすることを使命に、邁進していきたいと考えております。

みなさまのご支援、ご鞭撻、何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、定期健康講座の今後の予定として

第10回、11回のラインナップが決定いたしましたので、お知らせします。



第10回 定期健康講座

「骨粗しょう症を治して骨折を防ごう」

■ 講師：元東京都リハビリテーション病院院長 林 泰史先生

林先生のプロフィール

1939年生まれ。64年京都府立医科大学卒業。65年東京大学整形外科に入局。東京都多摩老人医療センター院長、東京都老人医療センター院長、東京都老人総合研究所所長、東京都リハビリテーション病院院長などを経て、現在、原宿リハビリテーション病院名誉院長。著書は『若々しく丈夫な骨をつくる本』(講談社)、『骨の健康学』(岩波書店) など多数。

● 骨折から“寝たきり”を防ぐ最新情報

超高齢化社会の進展に伴い、益々患者数が増加している“骨粗しょう症”。転倒から骨折し、そのまま“寝たきり”状態に移行してしまう患者さんも少なくないといわれています。

本講演では日本における骨粗しょう症のトップ・ドクター——林泰史先生が、最近解釈が変わりつつある同病の最新情報をもとに原因、罹患を防ぐ生活処方、なってしまったからの治療法などをわかりやすく解説します。50歳以上、特に女性の方は必聴の講演といえます。

■ 日時：6月4日(土) 午後2時～午後3時30分
※開場は午後1時30分

定期健康講座では、みなさまがお聴きになりたい“講演テーマ”を受け付けております。

「がんの疼痛治療」「がんを抑制する食事」「認知症」「効果的な運動法」等々、ご興味のあるテーマがありましたら、講座当日、担当者にお気軽にお申し付けください。

また、メールでも受け付けております。メールは『免疫療法コンシェルジュ』(左頁下のアドレス)にアクセスしていただき、最初の画面の一番上にある「お問合せ」からご送信ください。

お話を聴いてみたい講師のご要望も同様に受け付けております。みなさまからののお便りをお待ちしております。

がん治療——探していた“可能性”が見つかる日

2016年「蓮見賢一郎先生講演会」の日程が決定いたしました

毎年、免疫療法の最新情報や、さまざまな臨床報告などをお届けしている「蓮見賢一郎先生講演会」。2016年のラインナップが決定いたしましたのでお知らせします。

ハスミワクチンで再発予防を徹底させたい人、HITV療法の最新情報を知りたい人、免疫療法について知識を深めたい人……等々、“がん治療”の突破口をお探しの方にとっては、必聴の講演。必ず健康回復のための手がかりが見つかるはずです。

ご本人はもとよりご家族、ご友人をお誘いのうえ、ぜひご来場ください。みなさまのお越しを心よりお待ちしております。

■ 広島講演会

Hiroshima

日時：7月2日（土）

午後1時～午後3時頃 ※開場は正午

場所：広島国際会議場 B1「会議運営事務室」
 広島市中区中島町1-5（平和記念公園内）
 Tel 082（242）7777

アクセス：・広島バス24号線吉島営業所行、
 または吉島病院行「平和記念公園」下車
 ・市電「袋町」または「原爆ドーム前」下車
 徒歩約10分
 ※詳細は広島市の永山医院のホームページをご覧ください。
<http://nagayama-cl.com/>

■ 大阪講演会

Osaka

日時：9月10日（土）

午後1時30分～午後3時30分 ※開場は午後1時

場所：グランキューブ大阪（大阪府立国際会議場）1101～1102号室
 大阪市北区中之島5丁目3-51
 Tel 06（4803）5585

アクセス：・京阪電車中之島線「中之島（大阪国際会議場）駅」
 （2番出口）すぐ
 ・JR大阪環状線「福島駅」から徒歩約15分
 ・JR東西線「新福島駅」から徒歩約10分
 ・阪神本線「福島駅」から徒歩約10分
 ・大阪市営地下鉄「阿波座駅」から徒歩約15分

■ 札幌講演会

Sapporo

日時：7月23日（土）

午後1時30分～午後3時30分 ※開場は午後1時

場所：かでの2.7 730号室
 札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル
 Tel 011（204）5106

アクセス：・JR札幌駅南口から徒歩約13分
 ・地下鉄さっぽろ駅から徒歩約9分／大通駅から徒歩約11分
 ・JRバス北1条西7丁目（停留所）徒歩約4分
 ・中央バス北1条西7丁目（停留所）徒歩約4分

■ 福岡講演会

Fukuoka

日時：11月12日（土）

午後1時30分～午後3時30分 ※開場は午後1時

場所：アクロス福岡 円形ホール
 福岡市中央区天神1丁目1番1号
 Tel 092（725）9113

アクセス：・西鉄福岡（天神）駅から徒歩約10分
 ・地下鉄空港線天神駅から徒歩約3分
 ・地下鉄七隈線天神南駅から徒歩約3分

講演はすべて入場無料です。

お問い合わせは—— 免疫療法コンシェルジュ 03（3556）1950 までお寄せください。

◆ Webの『免疫療法コンシェルジュ』では、これまで開催した「定期健康講座」の動画や、「はじまりのページ」連載の“マクロビオティック・レシピ”など、さまざまなコンテンツをご覧いただけます。今後の「定期健康講座」の予定も随時更新しておりますので、どうぞ下記アドレスへアクセスしてください。『免疫療法コンシェルジュ』 <http://wellbeinglink.com/>

